

ガザ ——サッカー少年の夢

「将来は ゴールキーパー」

イブラヒム・ハダーブくん(12歳)。2014年8月の戦争の最中、近所に爆撃があり、兄のワシムくん(17歳)と現場を見に行ったところ再度爆撃があって兄弟は負傷。イブラヒムくんは左膝下を失って全身血まみれになりました。ガザで緊急手術を受けた後、ドイツで治療を受けて帰国。1年前から当会のリハビリ支援を受けています。

残った右足に大きな負担がかかるので、イブラヒムくんには筋力トレーニングが必要です。ゴムバンドを使って負荷をかけた筋力トレーニング、投げたボールを受け取ることで瞬発力や筋力を養うトレーニングをしていましたが、かなりきついトレーニングで時々顔をしかめていました。また、理学療法士が家庭でできるトレーニングも指導しています。

以前は「筋力指数」が3だったのがいまでは4まで改善しました。地元の義肢支援団体から義足の提供を受けましたが、切断部分の成長が早く義足の接合部にあたるのが痛いと言います。成長に伴って次々に新しい義足が必要なのですが、義足を待っている人が多くてすぐには入手できません。足の再手術も必要だろうと理学療法士は語っていました。また被弾して腸の一部を切除しているそうで、排せつにも問題があります。

昨年リハビリを開始した時、イブラヒム

2014年のガザへのイスラエル軍による爆撃によって負傷し、障害を負った子どもたちへの支援を続けています。2016年度は500人の子どもに医療チームが訪問リハビリを行いました。その一人を紹介します。



義足をつけるのにも慣れた

くんはドイツから戻って以来、車いすの生活をしていたため筋力が衰えて立つこともできず、一人で学校に通学できるようになるという長期目標が立てられました。しかし週3回のリハビリが効果を発揮して、いまでは家から1・5キロ先の学校まで、義足をつけて近所に住む同級生と一緒に徒歩で、時には自転車で通学しています。

当初は脚を失ったストレスを兄たちにぶつけ、家では手当たり次第物を壊したり投げたりしたこともあったそうです。また通学を嫌がり友達と関わろうとしなくなりました。そのため心理専門家が35回のセッションを行い、関係づくりをして、彼のストレスはかなり解消され、学校にも進んでいくようになりました。

現在イブラヒムくんは小学校6年生。兄は学校についていけないと悩んでいますが、イブラヒムくんは無事に進級しました。学校では国語と体育、特にサッカーが一番好きで、リアルマドリッド(ス

ペインのプロチーム)のファンです。ゴールキーパーをやりたいと胸を張りました。

一家の住まいは一間と台所だけ。トタン板をふいただけの屋根で天井もありません。6人の子どもがいるのにお父さんは失業していて生活は大変です。しかしお母さんは家の中をきれいに保ち、その支えで、イブラヒムくんは心理的に落ち着いてきたように見えました。

ワシムくんが「電気はないし、また戦争が来るかもしれないと考えてしまう生活は大変だよ」と言っている横で、「電気もなくて大変だけど、良いことも悪いこともあるかな。支援のおかげで学校に行けるようになったのは本当に良かったと思ってる」とイブラヒムくん。障害を抱えながらも、たくましく生きようとする少年に圧倒されました。

イブラヒムくんや、他のたくさんの子どもの健康と心理状態、生活の質が改善されることを期待して、今年度も訪問リハビリ支援を継続します。



兄とサッカー



自転車を片足で器用に乗りこなす



ワシムくんも足を骨折し左右の長さが違って足首が動かないためリハビリ中。リハビリを見守るお母さんと妹たち。戦争後に生まれた末っ子はナジャ「生き延びた人」という名前が付けられた